

相手・目的を意識して話す・書く子に

京都女子大学教授

吉永

幸司

「もつひと言があつたら…」と想つたこと
日記や一枚文集を国語教室作りの柱にしてきた過程で
いろいろな子どもたちの生活に出会つた。次の日記もその
一つである。

きょう、おばあちゃんが ぎふからきました。

お父さんの車できました。

おみやげをもらいました。

うれしかったです。

日常的に目にする文章であり「よかつたね。」と朱筆を加えれば済むような内容である。しかし、この日記の背景に次のような生活があることを知っていれば事情は異なってくる。

この子の祖父母は、長年、岐阜で二人暮らしをしていた。しかし、祖父が亡くなり、一人暮らしをしていた祖母が高齢になり、大津でいっしょに暮らすということになった。家族にとって新しい生活の始まりがこの日であつた。

家族の生活様式が変わることを知り、日々の指導に役立てる手がかりを得るうえでは貴重な日記である。しかし、この文だけでは、そのような背景を理解するのは難しい。「きょうから、おばあちゃんといっしょにくらします。」という意味のひと言があつたら、それを手がかりにすることが出来る。一文を書き加えていたとしたら、それが手がかりに、この日記の背景を知ることが可能になる。幸いこのときは、あらかじめ、この家庭の事情を知っていたので、その後の指導に配慮もできたが…。

同じようなことで、「私は、このころ、学校がおもしろくありません。」と、突き放すような書き方の日記に出会つたこともあつた。それが気になり、時間をかけて話し合つた結果、学級にいじめがあり、その悩みを訴えたものであつたことを理解したこともある。

見逃しそつになる文章の奥にある子どもの心を読み取

るのは学級担任として大事なことである。しかし、相手を意識したひと言がなかつたために、多くの子どもたちの生活や心を見逃してきたのではなかつたかという後悔のようないふれかけがある。

子どもを大事にするというなら、読み手に伝わるような文章を書く指導をもっと大切にしておくべきだったと反省している。

二 相手・目的を意識して話したり書いたりする子に
学校でも家庭でも、大人がもの分かりがよくなり、言葉が必要としなくても、生活が成り立つという傾向がある。「総合的な学習の時間」などの学習の後、お礼の手紙を書かせると、多くの場合、

「楽しく勉強しました。ありがとうございました。」

という言葉が並び、「何が楽しかつたか。」「どんなことが役立ったか。」ということにふれて書くことが少ないといふ。それでも、受け取った人からは、丁寧なお手紙が届く。手紙の交換だけでなく、この機会に国語科教育という目で少し立ち止まってみたらどうだろうか。

「この文章で気持ちが相手に伝わるか。」「本当に伝えたいことは何か。」「手紙を読んだ人の心に伝わるように書いてあるか。」を繰り返し問う教室であつてほしい。

図書委員会活動で六年生が「本を大事にしてほしい。」といふことを話題にして話し合つていた。

「ポスターの字は、大きくして漢字に読み仮名をつけた方がいいよ。二年生が読めるように。」

「集会でお願ひする文は、難しい言い方はやめた方がいいね。図に書くと、もっと分かつてくれるよ。」

委員会活動をする子どもたちには相手、目的の意識があるという確信をもつたときであつた。

.....

日記や手紙、あるいは日常的な会話に相手・目的を意識して話す・書くことができるようになれば、言葉と心を大事にする子どもが育つという思いは強い。

